

杉野一博 選 ★

秋の蜂恋のメールと浮かれおり

浮かれの判断より「浮かびおり」

船矢美雪

起き出て朝陽の芭蕉かな

やはり五七五のリズム感が欲しい

滝田慶子

この町の知らぬ顔する木槿かな

「この町の素知らぬ顔の木槿かな」

山本俊郎

野葡萄や国と逃れて来る列車

映像でよく見ているのでここに移されても弱い

船矢美雪 ★

杉箸のきっぱり割れて冷麦と

下五の視点決まっている

伊東次雄

ハイネケン流れる星の航路かな

身近な素材が幻想に結びついて行く

山本俊郎 ★

遠き日の街はゆらゆら枯れ草と

下五 別の草をしつかり置いた方がいい

滝田慶子 ★

猫死んで猫の陶あり黍嵐

中七の物の存在感 黍嵐がそれをたかめる

上澤孝二 ★

安曇野や小澤征爾虫しぐれ

中七「小澤征爾や」の親近感を

山本俊郎 ★

银杏の葉子と母の肩に止まろうか

「银杏の葉子と母の肩まるまっつて」など

森山圭悦 ★

海見ゆる崎守駅や野紺菊

中七の把握が面白い

上澤孝二 ★

薄紅葉汀に消えぬ砂の塔

取合せの妙 薄紅葉効果的

船矢美雪 ★

ひとつのみ鬼灯点る薄暮かな

上五言葉強いが 下五との取合せでいきている

松原智津子 ★

街道のナナカマドの灯はてなくて

「ナナカマドから街道の果てしなし」

森山圭悦

メモ帳にまだ照らしあふ月の雲

月光の見事さがなかなか消えなくて

杉野一博

満月に犯されてゆくひとりの夜

主観表現がなまなましい

木宮節子 ★

自爆テロとなり秋の蜂掃除機へ

上五の比喩 現代では逆に弱い

木宮節子

国柄の縞められてゆく雨月かな

さらりとした表現 雨月との取合せも

上澤孝二

猫すらも引きかえす崖すすきの穂

すすきの穂が効果的

森山圭悦 ★

電線に秋の燕のドレミファソ

秋の燕がよくとらえられている

松原智津子

風鈴や短冊ばかりくるくると

中七の視点がいきっている

伊東次雄 ★

縄文の媼となりて落葉掻く

縄文の媼そのものが現れて面白い

木宮節子 ★

木の裏で少年となる秋の暮れ

純粋さをときどき求めたくなって

杉野一博 ★

流れ星抽斗のみな収められ

抽斗がいったいの上を流れて

杉野一博 ★

行く雲や日の照り翳り大花野

大景把握 天と地と

松原智津子 ★

草茂る空屋にひとつ庭ぼうき

庭ぼうきが象徴的にとらえられている

伊東次雄 ★

ここよりは安全地帯はせとの葉

芭蕉の葉の大きさが浮かぶ

滝田慶子 ★

追記 「野紺菊」のこんぎく 紫の野菊  
「黍嵐 きびあらし 野分草嵐」  
「壺」 おうな 老女  
「雨月」 うげつ 十五夜の月 雨降り